

大阪・関西万博開催に向けた御意見

御所属 昭和女子大学 ダイバーシティ推進機構キャリアカレッジ 学院長
御名前 熊平 美香 様

1. 2025年の大阪・関西万博に何を期待しますか。

(是非すべきこと、また、するべきではないこと、後世に残すべきもの等)

- 万博と合わせて教育が変わり、最先端の教育の街になっていくと良い。社会と教育に関しては様々な議論が教育改革の中で議論されている。画一的に学ぶのではなく学びの多様性を前提とした学校にする、地域密着型の学校にする等の方針があるが、一番の狙いは社会と共に学ぶ学校になることである。2025年には社会と共に学ぶ学校が実現されていて欲しい。
- クワトロ・ヘリックスという、政府、アカデミア、企業、市民が同じ目標を持って社会を作るモデルがある。大阪はアカデミア（大学）が豊かな場所であり、このモデルの実現ができるのではないかと。教育と社会作りの連携モデルができることが望ましい。社会のあり方についてもレガシーとしてデザインできるとよい。
- オープンデータ化とスマートシティズン憲章の取り組みを進め、スマートシティズン構想を立ち上げるのがよいのではないかと。オランダには、ワグソサエティという、デザイン系の方と技術系の方と市民が連携してイノベーションを起こすプラットフォームのような場がある。そこでは、スマートシティズンシップ憲章の取り組みを行っている。デジタルデバイドのある人たちもデジタルの世界に取り込んでいく取り組みも実施している。オランダではデータもオープン化されており、町全体の環境汚染を住民が個人のスマートフォンで測り、全体を見える化する取り組みも行われている。
- 世界の優秀な若者がどこで働きたいかというランキングで、日本はアジアで最下位であるというデータがある。一方で、大阪はフラット・オープンなカルチャーがあり、グローバルな気質が強いと感じる。世界の人達がオープンイノベーションを行いたい、働きやすいと思うような場を大阪に作って欲しい。
- ピースフルスクールというオランダで導入されている幼稚園～小学生を対象としたシティズンシップ教育がある。社会的正義を守る市民（地球市民）を育てることを理念としている。未来の世代が、地球規模の視点に立った考えを持つことが出来るか、それとも一国家の利益だけを考えるかで未来が変わると言われている。SDGsの目標達成も含めて、今後、地球全体を守っていく若者を育てる取り組みを進めてはどうか。子供たちを地球市民にしていこうという議論をして欲しい。
- 昭和女子大学ではダイバーシティ推進の取り組みを行っている。共働き社会の実現・働き方の多様性に関してもこれから必要になるため、ダイバーシティに取り組んでいただけるようお願いしたい。

2. 大阪・関西万博で見せるべきコンテンツは何でしょうか。

(例：最先端技術の実証、SDGs達成への貢献、ライフサイエンス分野との連携等)

- ワグソサエティでは、携帯電話が「どこで作られているか」といった疑問から出発したプロジェクトが、市民が自分たちでスマートフォン「フェア・フォン」を作って売る取り組み

みに発展している。技術系の人と普通の人繋がることで、普通の人が思った疑問やアイデアを形にしていくという営みは今の時代にもマッチしている。こういった市民を巻き込んだ取り組みが、万博でも成されるとよい。

- ハラリ氏（※「ホモ・デウス テクノロジーとサピエンスの未来」の著者）によれば、バイオテクノロジーと情報テクノロジーが繋がることで大きな変化が起きると言われている。テクノロジーが発達し、人間が自分自身について認知できないことを機械が認知できるようになる、内面まで認知することが出来るようになるという世界が実現したときに、人間の自由意志がどこに向かうのかという問いを投げかけている。2025年には、「人類がどこに向かうか」ということが大きなテーマになっているため、そのようなテーマのセッションを海外と共同で行うのが良いのではないか。
 - 現在、テクノロジーの革新によって倫理的なテーマに関する議論を迫られる。たとえば、自動運転でも、運転手の命を守るのか、歩行者の命を守るのかという倫理的問題について、技術者が答えを決めることになる可能性がある。技術の発展によってすべての社会システムを見直さなければならない時代であるため、倫理的な人間のあり方も含めて前向きに想像できるようなパビリオンが出来るとよい。
 - 東洋経済の記事（※「13年の議論で生まれた『驚異の図書館』の裏側」2017年9月26日）の中で、デンマークの図書館の話が取り上げられている。今では、1日約5000人が来館する図書館となっているが、元々「ITの時代に図書館は要らなくなるのではないか」という命題を持った館長が、デザインシンキングを用いて地域住民・子供と「どんな図書館が欲しいか」議論を重ねて作られたものである。この取り組みで興味深い点は、コンペに参加した設計事務所は、子どもたちのプレゼン映像を視聴し、子どもの提案を必ず1つは盛り込むようにした点である。万博でも、何かを作るときに、子ども達の提案を取り入れるようにすると、子どもたちに対するよいメッセージになると考える。
3. **会場計画及びインフラ整備について、新たなアイデアや御意見をお願いします。**
(例：会場のデザイン、水面や緑地の利活用、待ち時間のない万博とするための手法、災害対策、暑さ対策等)
4. **そのほか、御自由に御意見をお願いします。**
- 日本では、社会人になったらイノベーションを起こすことを期待されるが、教育の場では自己肯定感が育まれないまま、大人になって創造を求められても難しい。小さい頃から主体性を育む教育を実施するとよい。脳科学では、4歳から5歳の期間が遂行能力が最も大きく伸びる時期であり、小学校6年生の段階までに大人と変わらない程の遂行能力が育成されるという知見もある。小学校での自己肯定感や自己効力感を育むことが重要である。未来社会のデザインという目標に、教育を重ねて、取り組みを進めていただけるとよい。子供が住みやすい街は、大人も住みやすい街であると思う。